

令和4年度版

第1層生活支援 コーディネーター 活動事例集



社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会
横浜市健康福祉局

はじめに

事例集の作成にあたって

横浜市では、平成28年度に体制整備事業が始まり、7年が経過しました。市内18区の区社協に配置された1層Coは、CP（または特養包括）の2層Coや区役所の包括ケア係長、事業担当者等と連携して「交流・居場所」「生活支援」「見守り・つながり」の各取組を通じて地域づくりを進めてきました。

この事例集は、1層Coがどのような想いをもって2層Coと共に地域づくりを進めているかという点を中心に、取組の背景や経過をまとめたもので、本冊子で6冊目となります。コロナ禍で入職された2層Coも多くいることから、令和4年度は、体制整備事業を通じて目指す地域の姿や地域づくりに向けた自分たちの役割を再確認する取組が多く見られました。また、タクシー会社と連携した移動支援の仕組みづくりなど、2層Coが1人で取り組むには難しい課題について区域全体で検討を行い、少しずつ具体的な取組につなげていく動きもありました。

各区の状況に合わせて試行錯誤を重ねている1層Coの取組について、是非ご一読いただければと思います。

略字表記

※この冊子では、次の用語については（ ）内の表示とします。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| ・ 地区社会福祉協議会（地区社協） | ・ 生活支援体制整備事業（体制整備事業） |
| ・ 区社会福祉協議会（区社協） | ・ 地域包括ケア推進担当係長（包括ケア係長） |
| ・ 市社会福祉協議会（市社協） | ・ 生活支援コーディネーター（生活支援 Co） |
| ・ 民生委員・児童委員（民生委員） | ・ 第1層生活支援コーディネーター（1層 Co） |
| ・ 自治会町内会（自治会） | ・ 第2層生活支援コーディネーター（2層 Co） |
| ・ 地域福祉保健計画（地福計画） | ・ 地域活動交流コーディネーター（地域交流 Co） |
| ・ 地域ケアプラザ（CP） | ・ ケアマネジャー（CM） |
| ・ 地域包括支援センター（包括） | ・ ボランティア（Vo） |
| ・ 特別養護老人ホーム併設
地域包括支援センター（特養包括） | ・ 新型コロナウイルス感染症（コロナ） |
| ・ 横浜市介護予防・生活支援サービス
補助事業（サービス B） | |

※サービス B 団体とは
横浜市からの補助を受けて、要支援者を対象に介護予防
・生活支援の活動を行う地域住民を主体とした団体です。

目 次

●A3版事例

中 区	地区社協によるタクシーを活用したお買物ツアーの開催 …… 1 ～身体状況が変わってもつながり続けられる環境づくりを目指して～
磯子区	久良岐丘自治会の移動販売導入に向けた取組 …… 3 ～あせらず ゆっくり 地域づくり 人づくり～
青葉区	「取組共有シート」と「地域支援計画」を活用した 2 層 Co 支援 …… 5 ～目指すべき方向性の確認作業を通じて～
瀬谷区	高齢者の生活ニーズを踏まえた「せやまるシニアプラス（インフォーマル情報誌）」の作成 …… 7 ～気持ちや暮らしが豊かになる情報発信を目指して～

●A4版事例

鶴見区	区域でのボランティア団体交流会の開催 …… 9 ～交流会の企画を通じた 2 層 Co 同士の連携強化～
神奈川区	2 層 Co への個別ヒアリングの実施 …… 10 ～把握した課題から区域の取組へ～
西 区	生活支援 Co 連絡会を学び合いの場へ …… 11 ～何のために地域へ出るのかを自分の言葉で説明できるように～
南 区	タクシー会社と連携した地域活動への支援 …… 12 ～地域活動の再開と高齢者の生活の充実に向けて～
港南区	「旅のことばカード」を活用した研修会の開催 …… 13 ～認知症とともに生きる地域づくりに向けて～
保土ヶ谷区	地区社協を対象とした「見守りの仕組みづくり研修会」の開催 …… 14 ～お互いを気かけあい、見守りあえる地域づくりを目指して～
旭 区	生活支援 Co が取り組むべき課題の検討 …… 15 ～多様な主体や新たな住民層との連携へ～
金沢区	生活支援ボランティアグループ同士のつながりづくり …… 16 ～コロナ禍でのモチベーション維持に向けて～
港北区	港北区社協の強みを生かした居場所の継続支援 …… 17 ～コロナ禍でも「みんなの居場所」でつながり続けるために～
緑 区	生活支援 Co 同士の仲間づくり、絆づくり …… 18 ～複数地区にまたがる課題の検討を通じて～
都筑区	「高齢者等の移動支援を考える会」の開催 …… 19 ～タクシー会社と連携した支援の仕組みづくり～
戸塚区	目指す地域の実現に向けた生活支援 Co 自身の役割理解 …… 20 ～啓発リーフレットの作成を通じて～
栄 区	移動販売サポートボランティア情報交換会の開催 …… 21 ～販売拠点を中心とした地域づくりに向けて～
泉 区	一人ひとりが主体的に参加できる生活支援 Co 連絡会 …… 22 ～区域全体で支えあえる関係性を大切に～

地区社協によるタクシーを 活用したお買物ツアーの開催



中区社協 米本 美穂

～身体状況が変わってもつながり続けられる環境づくりを目指して～

2層Coと区社協地区担当者が地域と共に、タクシー会社と連携して「高齢者の外出の機会の創出」「つながりの維持」に向けて、取組を進めています。

取組のきっかけ

中区は山・坂・階段が多く、「バス停まで行くことが難しい」「サロンがあっても通うことが難しい」等、体制整備事業が始まる前から「高齢者の外出」が課題として挙がっていました。以前から、移動手段の確保について関係機関等との話し合いを重ねてきてはいるものの、具体的な取組や課題解決に至っていない状況でもありました。また、コロナ禍で地域活動が停滞し外出の機会や交流の場を失い、人とのつながりや地域の居場所とのつながりが途切れてしまった方が多いこと、地域活動者からも顔見知りの方たちの身体機能の低下等を心配する声や、何とかつながりを維持できる方法はないかといった声も聞こえていました。そこで高齢者が安心して外出できる移動手段の1つとして、タクシーを活用した取組ができないかと考えはじめました。

まず、神奈川県タクシー協会から「タクシーの現状」について話を聞きました。コロナ禍でのタクシー稼働の厳しさや難しさがあること、中区内では観光地が多くあるためタクシーを路上で捕まえて利用するメーター料金制での利用が多いことや、学童保育等の送迎にもタクシーが活用されていることなどを教えていただきました。お話を伺う中でバス停まで行くことが難しい高齢者にとって「タクシーは唯一『ドア to ドア』の公共交通機関」として活用の可能性が多くあることが改めて見えてきました。私たちが思っている以上にタクシーの利便性は向上している実態もわかったため、地域活動の中で生かすことが出来れば、普段の生

活がより豊かになるのではないかと考えました。

2層Coや区社協地区担当者が地域の声を丁寧に拾いながらニーズを受け止め、さらに顔を合わせて一緒に何ができるのかを考えることにしました。地域で活用できる移動の仕組みを創出できれば、地域の力も一層高まっていくことにつながると考え、まずはタクシーを利用したイベントから実施しました。

1層Coの想い

タクシーの活用について、まずはイベント的に取組を行い利便性の良さを地域活動者に伝えていくことから始めました。また2層Coには、タクシーを活用した取組を事業化することがゴールではなく、移動の課題を解決する為の一步目の取組であることを伝えてきました。

2層Coと地区担当者が一緒に地域の方たちと話し合いながら地域づくりを進めていく上で、1回限りの取組で終わらせない働きかけを心がけるよう伝えていきます。1人の困りごとや気になることを地域の皆さん自身が自分事として捉え、少しずつ地域活動につながり、その結果地域の方たちの安心感につながれば、と考えています。

取組の内容

今年度もタクシーの取組を進めていく際に「地域活動者の方たちにタクシーを日常的な地域活動に活用してもらえるよう、より身近に感じていただくにはどうするか？」と2層Coたちと話し合いました。その結果、まずはタクシーの仕組みを2層Co自身が知ることと、区内タクシー会社との関係性を構築するきっかけが必要だと考え、手分けをして各会社を取材することにしました。取材した内容は2層Coがまとめている広報紙『かわら版』の特別号として発行し、CP運営協議会や地域の集まりの場で配布しました。かわら版を見た地区社協の役員等関係者や老人会から「タクシーの活用について詳しく聞いてみたい」と相談が上ってくるようになりました。そこで2層Coと地区担当者で進め方を確認し、地域の方との話し合いの場をセッティングしました。

第6地区社協では、コロナによりバスでの日帰り旅行を実施できずにいました。そこで、ふれあいサロンの参加者を対象に安心して外出し、交流できる機会としてタクシーを活用した南部市場への「お買物ツアー」を企画し、10月に3日間実施しました。タクシーを活用する最大の利点は、何よりも家の前までの送迎ができることです。また、近場への買物であるため往復の移動時間もそれほど長時間にはなりません。地区社協役員が日頃気にかけていた方に積極的に声をかけ、バスでの日帰り旅行では参加が難しい身体状況の方や1人暮らしの男性等に、参加してもらうことができました。



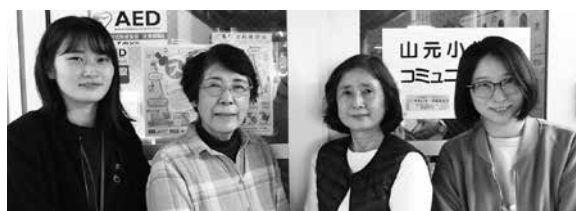
タクシー乗降の様子

Comment

タクシーの利点は、自宅そばまで迎えに来てくれること。普段、1人暮らしで買物も必要最低限の物を購入されている方も、たくさん購入されていました。（第6地区社協 事務局長 小林 君代さん）

参加者からは「楽しかった」「またやってほしい」といった嬉しい声をいただきました。今回実施した内容を基に、また来年度も実施していければと思います。（第6地区社協 副会長 長沼 敏恵さん）

タクシーを利用することで安心して参加でき、イベント的な企画は「外出してみよう」と背中を押すこともできるので、そういった活動をサポートできればと思います。（箕沢CP 2層Co 加藤 万稀さん）



左から 加藤 万稀さん、小林 君代さん
長沼 敏恵さん、区社協職員 亀井 美里



南部市場専門店街でお買物

今後に向けて

タクシーを使ったお買物ツアーのようなイベント的な使い方の他にも、参加者一人ひとりの状態を踏まえながら会食会や居場所に安心して参加してもらえるようにタクシーでの送迎を検討し始める等、地域活動にタクシーを活用していく可能性が広がりつつあります。

地域の関係者やタクシー会社との話し合いの場は、双方の思いや考え方を擦り合わせるための大切な場となっていると感じます。今後は、身体状況が変わってもサロンなどに参加できる、地域とつながり続けられる環境づくりを目指していきたいと思っています。

久良岐丘自治会の 移動販売導入に向けた取組



磯子区社協 右馬 彩子

～あせらず ゆっくり 地域づくり 人づくり～

買物の場としての移動販売の導入だけではなく、地域に根ざした交流の場となるよう地域住民の気持ちや想いを醸成しながらプロセスを大切に検討を進めました。

取組のきっかけ

1層 Co としてのこれまでの経験から、移動販売についてはスタートまでの過程における支援機関の関わり方がその後の継続性に大きく影響することを感じていました。スピード感を重視するあまり、地域住民が主体的に関わることなく始まった移動販売は、売上げが低迷すると企業が撤退してしまう場合もあります。一方、地域住民と共に検討して始まった移動販売は、交流の場になり、活気あふれる会場になることが多いです。導入に向けた検討の過程で地域住民の気持ちや想いを醸成していくことができれば、地域づくりにもつながると考え、令和3年10月の生活支援 Co 連絡会でそうした移動販売を通じた地域支援について説明しました。2層 Co とは「困っている人がそこにいるか、課題を解決する必要があるかを見極め、地域住民のニーズが高まった時にやるのが大切」と確認しました。

その後、屏風ヶ浦 CP 2層 Co から久良岐丘自治会で検討しているとの連絡がありました。このエリアは山坂が多く、高台にある住宅地で近隣にスーパーがないため、買物に不便を感じている地域住民が多くいます。以前から移動支援に関して課題感を持っていた2層 Co が自治会長に打診したところ、移動販売導入に向けた検討をすることになりました。そこで、これまでの取組を生かすために、2層 Co・区役所・区社協（地区担当者・1層 Co）でプロジェクトチームを作り、移動販売のスタートを令和4年秋と想定し、そこまでのマイルストーン（道標）を細かく丁寧に設定しました。支援機関は、早く結果を求めてしまいがちですが、

会場やスタート日だけを決めることが、私たちの仕事ではありません。会長の想い、地域住民の気持ち、企業の熱意を置き去りにしないプロジェクトが始まりました。

1層 Coの想い

私が大事にした事は、「あせらず、ゆっくりと時間をかけて、地域に寄り添うこと」でした。プロジェクトチームでは、スタートまでの過程で小さな道標をいくつも作り、それらを丁寧に進めて行きました。道標を大事に、でもしばられずに、時には行ったり来たりする時もあります。早くスタートしたい会長の気持ちに2層 Co が寄り添い「うん、うん、そうだね。会長」と話を聞きながら、説明してくれる場面もありました。そして、約1年にわたる取組の結果、会長・地域住民・企業・私たちの気持ちがひとつになって、スタートを迎えることができました。



プロジェクトメンバー 左から 区社協職員 古市 麻里
区高齢・障害支援課 包括ケア係長 本村 健一さん
屏風ヶ浦 CP 2層 Co 関 洋子さん

取組の内容

まずは、地域住民の声を聞くために買物についてのアンケート調査を実施しました。アンケートでは、山坂が多く、タクシーを使って買物をしていたり、定期的に遠方のご家族に食料品を届けてもらったりしている方が多くいること等がわかりました。会長は、「実際に地域住民の声を聞くことで移動販売の必要性について確信が持てた」と話しています。

次に、会長と移動販売の具体的なイメージを共有する必要があると感じ、他地区自治会の販売会場に見学に行きました。そこでは、自治会内に3か所の会場を設置しており、歩行が大変な人も自宅から近い会場で買物ができるので助かっている、と話を聞くことができました。会長は当初、1か所での実施を考えていましたが、見学先で買物客の声を聞いたことで複数箇所で開催することの必要性に気付き、自ら交渉し計4つの会場で実施することになりました。

7月に住民説明会を行い、会長が地域の主要なメンバーに声かけをし、参加してもらいました。この方々は今では積極的に会場に来くんだり、高齢者へ声をかけたり、買物のお手伝いをしている姿が見られます。8月にはプレ実施を行い、これから始まる移動販売がどのような取組なのか体験してもらいました。そして、秋晴れの空の下、9月15日に出発式を行い、自治会・CP・区役所・区社協等関係者が集まり、会長の声かけで移動販売が始まりました。



移動販売の様子

Comment



久良岐丘自治会は高台に位置しています。高齢になってくると通院、買物がきつくなり、毎年のように高齢者がこの地を離れて行きます。CPともこの話をしていたので、今回の実現に結びつきました。CP・区役所・区社協それぞれから想像をはるかに超えた支援を頂き大変感謝しています。スタートして3か月が経過し、「来てくれて本当に助かる」との声を耳にします。この取組を根付かせるまでには、まだまだ時間はかかりますので、自治会としては今後もフォローして行きたいと思います。引き続き関係各位の皆様方のご支援を頂きたいお願い申し上げます。

久良岐丘自治会 会長 松島 勝美さん

今後に向けて

移動販売のスタートは支援のゴールではありません。2層Coは、「継続がこの取組で本当に重要なこと」と話しています。会長は出発式で、「移動販売導入のステップで石橋を叩きすぎて壊してしまうのではないかなと思うほどゆっくりと時間をかけていた。でもそれは、SDGs（持続可能）なまちづくりを目指し、道すじをつけることが大事なんだ」と挨拶をしていました。チームメンバーは、そのメッセージに感動して涙ぐんでいました。

導入後の1か月は、メンバーが交代で毎週見学に行き、その時の状況をプロジェクト用情報共有シートに記入し、常に最新状況を確認しています。シートには、販売状況はもちろん、気になることや気になる人について記載し、三者でコメントを返すようにしています。それらを基に、定期的に振り返りもしています。移動販売だけでは対応できないニーズも出てきているため、次なる課題にも目を向けていきたいと話しています。

「取組共有シート」と「地域支援計画」を活用した2層Co支援



青葉区社協 野々村 まなみ

～目指すべき方向性の確認作業を通じて～

「取組共有シート」の作成にあたり、2層Coが目指す地域の姿や取組の目的を掘り下げて考えられるよう支援しました。また、CPと区社協が同じ方向を向いて地域支援に取り組めるよう「地域支援計画」の話し合いの場を設けました。

取組のきっかけ

1層Coとして、区内の2層Coからの相談を日々受けるなかで、2層Co自身が自分に求められている役割や目指す地域の姿が分からなくなり、戸惑いながら地域と関わっている様子が気になっていました。また、2層Co同士が情報交換する時間が少ないために、お互いの取組や成果、悩みなどが見えづらいという課題も感じていました。

さらに、コロナ禍で生活支援Coが地域へ出向く機会が減ったことで、住民や他職種から見ても、生活支援Coの動きが見えづらく「生活支援Coは何をする人か」という疑問をもたれることが多くなりました。また、生活支援Coが包括などの他職種と一緒に事業を進めることが多くなるにつれて、単独で動いていた時よりも生活支援Coとしての専門性が見えにくくなるということも感じていました。

そこで、2層Coが感じている地域の課題や専門職として思い描く地域像、課題解決のための取組をより具体的に言語化することから始めたいと考えました。

一方、区社協では、地域支援計画が一部の地区しか整備されておらず、地域支援の目標を区社協とCPがあまり共有できていないという課題がありました。また、区社協の地区担当者と2層Coが、地域への働きかけ方などについて、じっくり話し合う時間が少ないことも気になっていました。

そのため、地区担当者と2層Coと一緒に地域課題などについて話し合う機会をつくり、同じ方向を向いて地域を支援できるようにしたいと考えました。

1層Coの思い

生活支援Coとして最も大切な役割は、住民に自分の地域で困りごとを抱えている人のことを我が事のように感じてもらい、地域でできることを話し合ってもらえるように働きかけることだと考えています。しかし、そのための「話し合いの場づくり」の支援は、他職種にはわかりづらいという課題も感じていました。

そこで「生活支援体制整備事業 取組共有シート」と「地域支援計画」を連動させた上で、地区担当者と2層Coの連携を深めることで、地域支援の専門職が、自信をもって地域支援に取り組めるのではないかと考えました。



地域支援計画策定に向けた話し合いの様子

取組の内容

1層 Co として、主に次の2つの取組を進めました。
【「生活支援体制整備事業 取組共有シート」の活用】

これまで使っていた、生活支援 Co の取組を振り返るシートを改訂し、「青葉区生活支援体制整備事業 取組共有シート」を作成しました。このシートは、2層 Co それぞれが「目指す地域の姿」「現状認識・課題」「具体的な取組計画」「振り返り（取組内容とその成果）」を記載し、年度当初の計画、上半期及び下半期の振り返りの年3回、生活支援 Co 連絡会及び所長会で共有するものです。

1層 Co としては、2層 Co 全員が自分の言葉で内容を具体的に表現できるように、シート作成時には2層 Co との話し合いの時間を持つように心掛けました。

結果として、2層 Co としての思いを深く掘り下げることで、「自分が何のために取り組んでいるのか初めてわかった」「自分の言葉で表現することは難しいけれど、大切なことだとわかった」など新たな気づきを得た2層 Co もいました。さらに、自分が思い描く地域のビジョンを見据えて、取組の展望を考えられるようになった2層 Co も多くいました。

【CP と区社協による地域支援方針の検討】

地域支援を進めるためには、区社協と CP が同じ方向を向いて話し合うことが必要であり、そのためのツールである地域支援計画の必要性を地区担当者へ伝えることに力を注ぎました。また、各 CP と区社協が地域の課題や支援の方向性などについて一緒に話し合う場を持つように何度も働きかけました。時には、区社協と CP が地域支援計画を作成する場に1層 Co として同席し、第三者だからこそ気づいたことを伝え、誰が見てもわかる地域支援計画が策定できるように後押ししました。また、地区担当者と1層 Co とで地域支援計画について話し合う機会も作りました。

今後に向けて

「青葉区生活支援体制整備事業 取組共有シート」の活用を通して、一人ひとりの取組が具体的にわかり、生活支援 Co としての専門性も見えてきました。また、地域支援計画を策定した地区が増えるにつれて、地域の課題や支援者として考える地域支援の方向性も明らかになってきました。

区社協と CP が同じ方向を向けるように話し合う機会も増えたことで、より一層、地域の状況を把握することができるようになってきたことは大きな成果だと思います。

ただし、1層 Co だけでは進められないことも多いため、今後も専門職が担当や組織を超えて、気軽に話し合える関係を青葉区全体で築いていければと思っています。

Comment

自分は経験が浅いため、他の Co の取組を知ること、自分一人ではなく、同じ目標に取り組む仲間がいることがわかり、何かあれば相談できるようになりました。（大場 CP 2層 Co 松尾 敏子さん）

取組共有シートについて、何をどのように記入すれば良いかわからず1層 Co に相談したところ、わかりやすく教えてくださり、自分の取組を可視化することで、改めて取り組むべき方向性を確認できました。（美しが丘 CP 2層 Co 谷本 典子さん）

日々の業務に追われる中で、取組共有シートを通して、改めて自分が取り組んでいることの目的や意義などが整理されて、とてもいいなと思いました。

（たまプラーザ CP 2層 Co 今田 有紀さん）



左から 松尾 敏子さん
谷本 典子さん、今田 有紀さん

高齢者の生活ニーズを踏まえた 「せやまるシニアプラス (インフォーマル情報誌)」の作成



瀬谷区社協 丸山 敦子

～気持ちや暮らしが豊かになる情報発信を目指して～

瀬谷区で作成し、定期更新している福祉マップを、地域の高齢者や高齢者を支援する CM がより実用的に活用できるよう、2 層 Co とともに高齢者の生活に必要な情報収集や効果的な発信方法について検討を行いながら、「インフォーマル情報誌」として改訂しました。

取組のきっかけ

瀬谷区では、高齢者の社会参加と、家族・CM 等支援者への地域活動情報の発信を目的に、高齢者の通いの場や生活支援サービス等の情報を集約した「瀬谷区福祉マップ（以下、福祉マップ）」を作成し、2～3 年ごとに情報の更新を行っています。元々包括の主任 CM を中心に作成していましたが、平成 30 年度から生活支援 Co が引き継いで更新しており、現在、200 件を超す地域活動の情報が掲載されています。コロナ禍である令和 3 年には、感染対策に配慮しながら継続している地域活動を紹介した「コロナ特別号」を発行し、活動自粛による体力低下を予防するために、身近な地域で人との交流の機会を確保できるように働きかけを行いました。

令和 4 年度は第 6 版の更新を行うことになり、作業を進めるにあたり、福祉マップの目的・対象・活用方法を生活支援 Co 連絡会で再確認しました。その結果、福祉マップ活用の対象者を、「高齢者本人」としている CP と、「高齢者を支援する CM など」にしている CP があることや、サークル活動を「介護予防」と捉えて掲載している場合もあれば、「自主グループ」と捉えて掲載していない場合もあり、CP により差があることがわかってきました。

また課題として、民生委員には福祉マップが有効に活用されている一方、個々の住民や CM などからの「活用した」との声が少ないこと、掲載している情報のカテゴリーについて第 3 版の更新から見直しを行っておらず、求められている情報が掲載されているのか精査されていないこと等、検討が必要な項目が見えて

きました。

このような課題を踏まえ、検討会を開催し、福祉マップ全体の見直しを行うことになりました。

取組の内容

2 層 Co との検討の中で、『福祉マップ』という名称について、福祉サービスが必要な方が活用するイメージがあり、身近な地域での仲間づくりや介護予防のための活動情報として捉えづらいのではないかと意見があり、対象者を 60 歳以上の高齢者として考え、名称を「せやまるシニアプラス」と変更しました。また、地域の高齢者や CM が必要としている情報が何なのか調査を行い、実際に活用できる情報誌として改訂を行うことになりました。

区役所が発行していた「体操福祉マップ」や、区内の生活支援 Co で作成した「移動販売一覧」のチラシなど、カテゴリー別に作成されている情報の一元化を目指し、作成元と連携し掲載内容を検討しました。体操や運動の活動には、運動強度がわかるアイコンを作成するなどの工夫をしました。

1 層 Co としては、CM の連絡会や包括の主任 CM 連絡会に参加し、ケアマネジメントの中で欲しい情報についてヒアリングを行ったところ、「地域サロンなどの情報は自力で参加できることが前提であり、ある程度元気な高齢者でないと紹介できない。CM が関わる方は、自力での行動が困難な方も多いため、生活全般に役立つ便利な情報を求めている」との意見がありました。具体的には、訪問理美容や福祉タクシーの情報、インターネットが使えない高齢者でも電話で頼め

る出前の飲食店、灯油の配達業者などの民間企業の情報が必要だということがわかり、新たに追加掲載することにしました。それらのニーズに対応する店舗等の情報については、地区社協の会議やVo分科会、地域サロン、住民の方が集まる場などで情報提供の呼びかけを行い、CPと区社協で協力しながら情報収集を行いました。



主任CMと2層Coとの検討の様子

1層Coの想い

これまでサロンや体操・趣味サークルなどの活動をインフォーマルサービスとして捉え、マップに掲載してきましたが、CMへのヒアリングにより、高齢者の日常生活に必要な情報はそれだけではないことに気づかされました。CMは、「それがあると高齢者の生活や気持ちが少し豊かになる」というサービス情報も求めていることがわかりました。

ニーズに対応する店舗等の情報は、地域の方を通じ、普段利用している出前の取れる商店などの生きた情報を集めることができました。そのため、必要な方に安心して情報提供が行えることをメリットだと感じています。

今後に向けて

完成した「せやまるシニアプラス」は情報量が多くなりましたが、欲しい情報を見つけやすくするために、カテゴリーの見直しやレイアウトの工夫を行いました。今後は、生活支援Co自身が目的や活用方法などをきちんと言葉で伝えながら、地域・関係機関等への配布を行っていきます。

また、今回の検討を通じて生活支援Coが地域支援を行う中で、普段から商店や民間企業の把握や関係の構築を行い、連携した支援を行っていくことの必要性を強く感じました。

そこで新たな取組として、高齢者の生活をより豊かにするため、高齢者の生活に役立つ企業・商店のサービス情報誌の作成を進めています。まずは試行として、瀬谷区の商店街などの協力を得ながら、CMが安心して紹介できる生活に必要なサービスの情報を2層Coと共にまとめていきたいと思っています。



情報誌「せやまるシニアプラス」の表紙
※「せやまる」とは瀬谷区のマスコットキャラクターです

Comment



CMには地域の「インフォーマルサービス」の活用が求められていますが、そもそも「インフォーマル」の定義が曖昧で、CMによって捉え方も様々です。

CMは制度やサービス以外に、利用者が日常生活に不可欠な水道や電気等のライフラインに支障をきたした時に解決してくれる“まちの専門業者”の情報も求めています。しかし、CMは詳しいことがわからず、安易に業者の紹介等ができないのが現状です。利用者が住む地域で気軽に相談できる“まちの専門業者”の情報を入手でき、その業者との関わりが見守り活動にも発展していくことを願っています。

二ツ橋CP 主任CM 平田 哲久さん

区域での ボランティア団体交流会の開催

～交流会の企画を通した2層 Co 同士の連携強化～



鶴見区社協 上屋敷 裕子

取組のきっかけ

区内では多くの生活支援 Vo 団体が活動していますが、コロナ禍で依頼件数の減少や活動者の退会などが課題となっていました。各団体では活動の継続に向けて様々な工夫をしていましたが、それらの情報を区内の団体間で共有する機会はありませんでした。

そこで、工夫した取組などを区域で共有できる機会をつくることで、各団体が新たなヒントを得て、活動をより充実させることができるのではないかと考え「生活支援 Vo 交流会（以下、「交流会」）」を開催することにしました。また各団体の設立のきっかけや、やりがい、活動上の不安等を共有することで、区内に多くの仲間や同志がいることを感じていただけたらよいと考えました。

さらに、この交流会の企画を2層 Co が合同で行うことで、横のつながりも深めていきたいと考えていました。

取組の内容

令和3年度の交流会は生活支援 Co 連絡会の「連携班」が企画を担当しました。開催にあたっては各団体への事前アンケートを実施し、活動概要について確認し、事前に2層 Co で共有しました。また2層 Co が団体へ個別ヒアリングも行い、交流会で聞きたいことのテーマを設定し、有意義な情報交換の場になるよう準備を進めました。

交流会当日は各 CP に団体の方が集まり、各会場を Zoom でつなぎ、5 団体総勢 26 名が参加しました。広報の工夫や具体的な活動内容への質疑、支援対象者の違い等について情報共有を行うことができました。



各会場を Zoom でつなぎ開催しました

令和4年度は新たに「居場所・たまり場」の活動をしている団体を対象に、これから活動を開始しようとしている団体にも声をかけて、「居場所づくり活動・つどいの場団体交流会」を開催しました。こちらは生活支援 Co 連絡会の「交流班」が準備を進めました。

コロナにより、つながりが希薄になりがちなか中には、住民同士の出会い・つながりの創出の場として居場所の役割がますます重要になると感じています。居場所・つどいの場団体の今後の活動にヒントとなるよう情報

交換の方法について検討を重ね、令和5年2月に開催することができました。

1層 Co の想い

令和3年度の交流会参加者からは「区内にこのように多くの団体があることを知らなかった」「自分のグループは男性ばかりだが、女性も多く活躍していることがわかった」「年齢関係なく、やる気があれば輝ける」などの感想があり、他の団体の活動からヒントを得ることができ、一定の成果は得られたと感じています。

また、団体同士の交流とモチベーションのアップにつながったと感じています。

企画を進めるにあたっては、2層 Co のアイデアを取り入れつつ円滑に準備が進むよう一緒に取り組みました。2層 Co 主体で企画を進めたことにより日頃の連携も強化され、情報共有することを通じて新たな視点や気づきを得られているように思います。

今後に向けて

これまでは活動テーマごとの地域活動団体の交流会を実施してきましたが、将来的にはサービス B 団体も含めた地域活動団体と、高齢者等への個別支援を行う民生委員、CM等との連携に向けて、情報交換ができる場も作っていききたいと考えています。

2層Coへの個別ヒアリングの実施



神奈川区社協 白石 梨々花

～把握した課題から区域の取組へ～

取組のきっかけ

神奈川区の生活支援Co連絡会では、令和元年度から情報交換シートを使用して、お互いの取組を共有する時間を設けています。このシートをもとに、各2層Coがどのような意図を持って、具体的に何を働きかけているのか、またそれに対する地域の方々の反応等も情報共有できると良いのですが、生活支援Co連絡会の中では十分に時間が取れませんでした。

そこで、2層Coからじっくりと普段の動きや思い、今後やりたいこと等を聞く時間を取りたいと考え、神奈川区としては初めて、区包括ケア係長と1層Coとで、全CPの2層Coに個別ヒアリングを実施しました。

取組の内容

ヒアリングでは、通いの場、生活支援、見守りの3つの活動に加え、移動支援・移動販売、地域支援・地域福祉計画、個別相談の傾向等という各項目について、地域の状況や取組の様子、それに対する2層Coとしての思い等を伺いました。コロナが少し落ち着いた令和4年6～8月にヒアリングを行ったということもあり、2層Coによる支援は通いの場の再開支援に多くの時間を割いていることがわかりました。

また、「コロナ禍でフレイル状態の方が増えており、生活を維持するのが精一杯の状態になってからの相談が多くなっている」という包括の懸念や、地域の方から「どこにも行く場がない」という声を受け、包括や地域住民と連携して新たに元気づくりステーションの立ち上げを行ったという2層Coもありました。

中でも特に気になったのは、地域での見守りの状況が把握しにくくなっている、ということでした。神奈川区では、全地区で「ふれあい活動員」による見守り活動が行われていますが、コロナ禍で活動員同士が顔を合わせて情報共有する場がなく、2層Coが個々の見守り活動の様子を把握する機会がなかったのではないかと感じました。

今後に向けて

神奈川区では、ふれあい活動員による見守りの他に、平成26年から住民支え合いマップ（以下、「マップ」）の研修会を毎年開催し、19地区68町内会がマップを活用して地域の見守りに取り組んでいます。コロナ禍で研修会が開催できず、地域でのマップづくりや更新作業を通した話し合いも中断している状況でした。50世帯程度の住宅地図を広げて、気になる世帯の状況を

共有しながら具体的な見守りや支えあいの方を住民同士で考える、というこの取組は2層Coが地域情報を把握する機会になります。そして何よりも地域住民が個別ニーズを地域ニーズとして捉えて課題解決に主体的に取り組むきっかけになります。

コロナ禍で入職した2層Coは、まだこの研修を受けていなかったため、今後地域住民と共に見守りや支えあいを進めていく後押しになればと考え、今年度は3年ぶりに研修会を開催しました。

1層Coの思い

ヒアリングを通じて、コロナ以前に比べて2層Coが地域の情報把握がしにくい状況になっているように感じました。通いの場等の地域活動が中止になることで、2層Coも地域の方との接点が少なくなり、困りごと等の声を直接聞く機会が減ってしまっています。その中でどのように支援を進めて行ったらよいか悩みを抱えていることが分かりました。

今後も、地域にあるニーズを把握し、個別ニーズを解決する地域活動の創出・発展を支援できるように、生活支援Co連絡会では意見交換を行い、日々の業務へのヒントを見つける場としていきたいと改めて感じています。



生活支援Co連絡会

生活支援 Co 連絡会を学び合いの場へ

～何のために地域へ出るのかを自分の言葉で説明できるように～



西区社協 原田 麻里

取組のきっかけ

西区では毎月の生活支援 Co 連絡会の中で、2層 Co がどのような取組をしたかを共有する時間を設けています。共有する際には、「交流・居場所」「生活支援」「見守り・つながり」の3項目に分類して、自身の取組を整理する「取組メモ」という書式を活用しています。

しかし、コロナ禍になり「再開した活動の様子を見に行った」という報告が多くなり、地域に出向いた際に、「活動者がどのような目的で活動を行っているのか」「地域にはどのようなことを望んでいる人があるのか」といったことまで踏み込んでアセスメントすることや、地域活動者に一緒に地域について話し合うことを提案するのを躊躇してしまう様子が見られました。

2層 Co 自身、何のために地域に出ているのか、何をを目指しているのかを明確に言葉で表現できないことを課題と感じながらも、どうしたらよいかわからないという状況であったため、令和4年度は、みんなで学び合う場を設けていくこととしました。



西区生活支援 Co メンバーと

取組の内容

年度始めの生活支援 Co 連絡会で「西区アクションプラン」と「体制整備事業の手引き」を基に地域づくりの目的やプロセスを確認しました。生活支援 Co 連絡会には毎回それらを持参してもらい、取組共有の際に、その取組が地域づくりのどの段階にあり、どこを目指して行っているのかを確認し合うようにしました。

また、「取組メモ」の書式も各 CP で毎年設定している体制整備事業の目標を記入できるようにアレンジし、取組と目標とがリンクすることが意識できるように工夫しました。

生活支援 Co 連絡会では、「何のために地域に行くのか」「地域で何を見てくるのか」といったアセスメントの意義や内容について、2層 Co の頭の中にあるものを言葉にして出し合い、可視化する作業を通じて、理解を深める取組を継続して実施しています。

さらに、2層 Co が自身の取組を整理し、事例としてまとめて発表する機会として「事例検討会」を実施しています。何のためにその取組を行っているかを整理し、自分の言葉で根拠を持って説明できるようになることを目指した取組です。

チームで目標を共有し、連携して取り組む必要があります。今年度は「地域づくりを学ぶ勉強会」を2回企画し、所長も含めた CP 6 職種と区役所、区社協職員で受講しました。今後も、3機関と一緒に地域のことを考えていけるようなチームづくりを進めていきたいと思っています。

地域からの「この地域で良かったね、住み続けたいね」の言葉が増えるように、みんなで一歩ずつ歩んでいきたいです。

1層Coの想い

コロナ禍で着任した2層 Co は、研修等で地域アセスメントの方法は学んでいますが、地域の活動が休止状態の為どのように実践していいかわからない状況だったのではないかと思います。2層 Co が感じている課題に対して何ができるか手探り状態でしたが、区推進会議の中で区役所も含めて方向性について検討することができたため、ここまで進めてくることができました。

今後に向けて

2層 Co は、アセスメント力とともに、自身のアセスメント結果を根拠を持って地域住民や関係機関へ発信する力も必要となります。引き続き、Co 同士での学び合いを続けていきたいと思っています。

また、地域に対して働きかける際には、2層 Co だけではなく、CP の他職種や区役所、区社協も含めた



生活支援 Co 連絡会の様子

タクシー会社と連携した 地域活動への支援

～地域活動の再開と高齢者の生活の充実に向けて～



南区社協 葛城 洋子

取組のきっかけ

コロナの影響により、地区社協が主催する日帰りバス旅行や高齢者食事会などの活動は休止が続いており、「高齢者が外出する機会が減ったことによって、筋力や気力が低下しているように感じる」と活動の担い手から声が挙がっていました。

また、高齢者食事会の代表者が集まる食事サービス連絡会では、「1人で会場まで来られない参加者が増えている」といった課題も挙がっていました。

そんな折、他区でタクシーを活用した外出支援の取組があるのを知った2層Coから「南区でもタクシーを活用した取組を実施できないか」との相談を受けました。地域活動の再開のきっかけになればと考え、区域でタクシーを活用した高齢者の外出支援についての検討を始めました。

取組の内容

タクシー会社と連携した取組を展開している中区の1層Coの紹介で、神奈川県タクシー協会(以下、「協会」)の方と打合せを実施しました。当初は、区域での仕組みづくりを考えていましたが、協会からは「モデル地区を選定して具体的な取組を始めてみた方がイメージがしやすいのではないか」とのアドバイスを頂きました。そこで、地域住民と共に高齢者の外出支援に関する協議体を実施していた2つのCPエリアからモデル地区を選定し、取組の検討を進めることとしました。

協会の声掛けにより、9月には区内及び近隣区で営業するタクシー会社7社との意見交換会を実施し、区内の地域活動の状況、高齢者の外出や移動に関する課題等をお伝えすることが出来ました。意見交換会の後、地域活動でのタクシー利用にご協力いただける会社を募ったところ、2社が協力を申し出て下さいました。

12月には2つのCPエリア合同で、地域活動者向けの説明会を開きました。協会の方にタクシーの便利な使い方やメリットなどの説明をいただき、どのような取組に活用できるかを専門職と地域活動者とで一緒に考える機会となりました。質問も多く関心の高さを知ることができました。

今後に向けて

説明会の参加団体では、既にタクシーを活用した日帰り旅行の企画や食事会への送迎を検討し始めています。2層Coを中心に区社協地区担当者と共に取組の実現に向けてサポートしていききたいと思います。また、取組の企画方法やタクシー会社への提案様式の作成、

依頼までの流れなどを整理し、モデル地区での取組が他のエリアでも展開できるよう支援していきたいと考えています。

1層Coの想い

地区社協が主催する日帰りバス旅行もコロナ禍で中止となり、楽しみにしていた高齢者が多かったことを役員から聞き、他の手段を使った開催を提案できればと考えていました。また、高齢者を対象とした地域活動では、食事会に限らず送迎の問題が生じており、Voが自家用車で会場までの送迎を行っているサロン活動なども、今後、Voの高齢化に伴い継続が難しくなることが予想されます。

今回のモデル地区での取組を、ゆくゆくは区内全体で共有し、タクシー会社と連携することで、バス以外での日帰り旅行の実施や、食事会等の送迎の問題を解消して活動を継続できるようサポートしていきたいと考えています。



地域活動者向け説明会の様子

「旅のことはカード」を活用した研修会の開催

～認知症とともに生きる地域づくりに向けて～



港南区社協 中原 彩絵

取組のきっかけ

認知症に関する取組を進める中で、区域では認知症サポーター養成講座受講者へのフォローアップが十分にできておらず、その後の活動につなげられていないという課題が挙がっていました。

また、2層 Co からは、地域ケア会議や包括カンファレンスで把握した認知症の個別ケースについて、どのように地域支援につなげていけばいいか、イメージしにくいとの声も挙がっていました。

そこで、まずは認知症の本人や家族の想いに寄り添い、一人ひとりが何ができるかを考えるきっかけとして、「旅のことはカード（認知症とともによりよく生きるヒント）」を活用できないかと考え、生活支援 Co 連絡会の研修班が中心となって研修を企画、実施しました。

取組の内容

令和4年11月の生活支援 Co 連絡会の中で、「旅のことはカード」を制作した（株）クリエイティブシフトを講師に招き、ワークショップ研修を実施しました。

「旅のことはカード」は認知症と診断された後も生き生きと暮らしている方の生活の秘訣をまとめ、他の認知症の方やその家族、地域住民などが自分の中に取入れられるように作られたヒント集です。

「本人」「家族」「みんな」という対象者毎にそれぞれの気持ちに寄り添ったり、それぞれが前向きに、よりよく生きるためのヒントとなるような言葉が1枚ずつのカードに記されています。

研修では40枚のカードの中から、自分が大切だと思う言葉を選び、その理由とともに自己紹介を行うワークがありました。カードを使うことで、お互いの想いを共有しやすくなるので、様々な場面でアイスブレイクや仲間づくりに活用できそうなワークでした。

また、このカードは扱い方にルールはなく、どのように使ってもよいとのことで、研修ではグループ毎に本人や家族、地域住民や子どもなどの対象者を設定して、このカードを使って何ができるかを考えるワークも行いました。



旅のことはカード

1層Coの想い

研修を受けて、「旅のことはカード」は様々な立場の人が共通の視点を持って、一つのことを話し合ったり、取り組む際にとても有効なツールであると感じました。一方、使い方にルールがなく、どのように使っても自由であるがゆえに、対象者や場面に応じて、使い方をその都度アレンジしていく必要があり、まずは私たちがこのカードの扱い方に慣れる必要があると感じました。



ワークショップ研修会の様子

今後に向けて

研修での経験を踏まえ、今後は2層 Co が主体となり、まずは地域交流 Co などの関係者に対してプレ実践を行う予定です。認知症の方とその家族に寄り添える地域づくりに向けて、両 Co が共にこのカードの持つ言葉の意味を理解し、使い方を研究することで、協働して取り組めると良いと考えています。

認知症について一人ひとりが自分事として考え、本人や家族だけが頑張るのではなく、地域全体が前向きに認知症とともに生きる地域づくりを進めるためのツールとして、ゆくゆくは地域の中でこのカードを上手く活用していけるようにしたいと思います。

地区社協を対象とした 「見守りの仕組みづくり研修会」の開催

～お互いを気につけあい、見守りあえる地域づくりを目指して～



保土ヶ谷区社協 工藤 さとみ

取組のきっかけ

保土ヶ谷区の地福計画では、地区社協が地区別計画の推進母体となっており、第4期計画ではすべての地区の目標に「見守り」がテーマとして掲げられました。

体制整備事業の目指す方向性とも一致しており、区域で見守りの仕組みづくりに向けた支援を行えないかと考えました。特に「見守り」は取組としての形が見えにくく、どのように進めるかが難しい状況にある中で、地区社協と地域支援チームと一緒に「見守り」について学ぶ機会があると良いと思っていました。

市社協が実施してきた「地域福祉つなぎ隊研修」では、プログラムの中に“自分の地域の見守りの状況を可視化し、見守りを行っている団体間のつながりづくりや課題共有に発展できるようなワークショップ”があり、この研修を地区社協と地域支援チームとで一緒に受講することで、「見守りの仕組みづくり」への第一歩を踏み出すきっかけになればと考えました。

取組の内容

地福計画の共同事務局である区役所との打合せや、地域福祉つなぎ隊研修の事務局である市社協を含めた打合せ、講師との打合せでは、各地区における「見守りの仕組みづくり」の支援につながるよう話し合いを重ねました。

地区社協の方には、研修の目的や内容などを地区社協分科会で説明するとともに、各地区担当者を通じて参加の呼びかけを行い、地域支援チームにも広く案内を行いました。

また、当日のワークショップでの話し合いが活発になるよう、地域支援チームの職員が担当地域の方と一緒にグループ分けにも配慮しました。

コロナ禍により開催を2度延期しましたが、令和4年7月に研修を実施することができ、22地区全ての地区社協から参加がありました。

1層Coの想い

研修の講義を通じ、地域での見守りの大切さを再確認する機会となりました。地域で行われている見守りの活動を5つの項目に分けて整理する「見守りマトリクス」の作成作業を通して、自分の地域での見守りについて俯瞰的に振り返り、強みや今後の目指す姿についても考える機会となりました。また、ワークショップでは他地区の方との意見交換を通して、見守りの取組を多面的に見たり、参考となる情報の共有ができたと思います。何よりも地域住民の方の気づきや学びの場を支援チームも一緒に共有できたことで、今後、各地区の地区別計画推進に向けて両者が同じ視点をもてる良いきっかけになったと感じています。

今後に向けて

ワークショップでは付箋紙や模造紙を活用して、より具体的な取組方法を「見える化」し、目指す方向性が確認できました。今後は参加した方だけの学びで終わらせることなく、各地区に持ち帰り、学んだ内容の発信や見守りの充実に向けて検討する場が大切となります。地域支援チームで連携しながら地域における「見守りの仕組みづくり」を支援していきたいと思っています。



見守りの仕組みづくり研修会

生活支援 Co が取り組むべき課題の検討

～多様な主体や新たな住民層との連携へ～



旭区社協 山田 綾香

取組のきっかけ

旭区では平成 30 年度より、13 名の 2 層 Co を 3 つの班に分け、食事サービス、サロン、ちょこっと Vo の各連絡会を企画・運営しています。その中では、地域活動団体への取材やアンケート調査、研修等を開催し、団体同士のつながりづくりや活動支援などを行ってきました。また、話し合いを通じて、2 層 Co 同士がお互いの視点や考え方などを学ぶ機会にもつながりました。

3 つの連絡会が設置されてから 5 年が経過しましたが、コロナ禍による地域活動の中断や活動形態の変化などにより、2 層 Co から「今までの取組を振り返り、今後必要な支援について改めて考えてきたい」という声が挙がりました。そこで改めて、生活支援 Co として向き合う課題や、その課題解決のために何に取り組むべきかを一緒に検討する場面を作りたいと考えました。

取組の内容

今年度の生活支援 Co 連絡会では「3 つの連絡会の企画・運営の在り方と今後の生活支援 Co 連絡会の進め方」をテーマに継続的に意見交換を行いました。その際、3 つの連絡会担当者別、経験年数別等、様々なグループ構成で話し合いました。Co によって、課題に感じる点や地域の見え方が異なるため、多角的な視点での意見が交わされました。

これまでの 3 つの連絡会運営を振り返る中で、2 層 Co からは「既存の活動団体の他に、企業や若い世代など多様な主体との連携も視野に入れたい」「高齢者の移動支援や担い手の確保など複数エリアでの共通課題についても考えたい」等、日頃の業務の中で感じている疑問や課題が出されました。

今後に向けて

この話し合いの中で、今後、企業・施設などの多様な主体や、地域活動に参加していない新たな住民層と連携した取組を進めたいという声が 2 層 Co から挙がってきました。その意見を受け、次年度は新たに「地域課題に対する資源の創出・開発」について検討する班を設けることになりました。具体的な取組はこれからですが、2 層 Co と一緒に考え、実践に結び付けることを目標に進めていきたいと思っています。

1 層 Co の思い

2 層 Co と共に 3 つの連絡会の進め方について検討していくことは、日頃の業務の振り返りの機会にもなるのではないかと思います、焦らず時間をかけて話し合いながら考えをまとめていくことを大切にしました。また、誰もが忌憚なく意見が言えるよう、発言しやすい雰囲気づくりを心がけました。

話し合いの過程を通じ、改めて体制整備事業で目指すことについて、共通認識を持つことができたようにも思います。また、13 名の 2 層 Co 同士で、この場を通じて、お互いの考え方や視点を学び合う機会につながると良いと思いました。



生活支援 Co 連絡会での意見交換

生活支援ボランティアグループ同士の つながりづくり

～コロナ禍でのモチベーション維持に向けて～



金沢区社協 安田 加奈

取組のきっかけ

金沢区内には住民のちょっとした困りごとに対応する生活支援団体が数多くあります。関わりの中で、団体の方から、コーディネートにあたっての調整や、Vo 活動の経験が少ない人への依頼の難しさなど様々な悩みの声を聞いていました。2層 Co や地域交流 Co は各団体の定例会や日常的な関わりを通じて、悩みの解決につながるような情報提供をする等、個々に対応をしています。しかし、それだけではなく、身近な地域で同じ立場や目的で活動する団体同士が横のつながりを持つ場が必要だと感じ、交流の機会を作ることにしました。悩みや活動の工夫を共有することで、今後に向けたヒントを得られたり、気軽に相談できる関係性が出来るようになることを目指しました。

また、団体が抱える悩みや区域の課題を把握することで、日頃、団体と関わりを持っている2層 Co や地域交流 Co と一緒に、今後の支援を考えるきっかけになればと考えました。

取組の内容

生活支援に関する Vo 活動を行う団体が、情報や意見交換を通して顔の見える関係づくりと活動へのヒントを得ることを目的に「ボランティア団体交流会」を実施しました。

実施にあたり、生活支援 Co 連絡会と地域交流 Co 連絡会、区社協との協働により、企画班を編成し、団体同士の悩み解決につながる場となるよう検討を重ねました。

当日は11団体が参加し、活動内容の紹介や現在の悩み等について、情報交換を行いました。コロナ禍で集まる場が少なくなっている中で、時間を縮小しての開催だったこともあり、話は尽きず、終了後は連絡先を交換している方々もいました。

団体の方々からの感想として「自分たちの活動の立ち位置が確認できた」「同じように頑張っている仲間がいることを知り、これからも活動を続けていく上でのモチベーションアップにつながった」等の声があり、同じ立場の人同士だからこそ得られたものがありました。

今後に向けて

地域の方々が活動を安心して継続していく上で、専門職等の関係機関のバックアップに加え、同じ立場で団体運営をしている方たち同士の横のつながり、その両方が必要であることを実感すると同時に、活動団体の方々もそれを望んでいることの確認ができました。今回は、短時間の開催として顔合わせをメインに、普段モヤモヤとしている想いを語る場としました。今後

は、各専門職の強みを生かしながら、各々の悩みの解決や活動の継続などについて検討できるよう進めていきたいと思っています。

1層Coの想い

定期的に団体同士が悩みを打ち明け、同じ立場だからこそ気持ちを共感し合い、モチベーションを保つことができるきっかけになればと思い、交流会を開催しました。

今後も思うように活動が進まないことがあるかもしれませんが、そんな時に団体同士で相談し合えるような関係づくりを1層 Co とし、とても大切にしていきたいと思っています。



ボランティア団体交流会の様子

港北区社協の強みを生かした 居場所の継続支援

～コロナ禍でも「みんなの居場所」でつながり続けるために～



港北区社協 渡辺 麻希

取組のきっかけ

令和元年に2つの地域から「地域住民が気軽に集える場がほしい」と空き家を活用した居場所づくりの相談がありました。地域住民や2層Coと共に立ち上げを行い無事にオープンしましたが、直後のコロナ蔓延により活動を中止せざるを得ない状況となりました。開所ができず収入がない中でも、光熱費や家賃等、毎月の維持費は支払わねばならない状況で、先行きの見えない不安から、担い手のモチベーション低下等も見られました。そこで、居場所の継続ができるよう港北区社協としての支援策を検討しました。

取組の内容

令和元年度に立ち上げ支援をした2か所（高田地区・師岡地区）の常設の居場所の運営組織づくりとして、目指すべき方向性を共有し、助成金の申請支援や各種法制度にかかる情報提供、関係機関との調整等を行いました。

令和2年度には、「オンライン導入サポートモデル事業」を新規に立ち上げました。地域の団体がコロナ禍でも工夫しながら新たな事業を発想できるよう、備品購入、使い方のレクチャー等のオンラインの環境整備を支援しました。その上でオンラインで居場所同士をつないだコグニサイズ、悩みや工夫を伝え合う情報交換会を実施し活用イメージを共有しました。

そして、令和3～4年度に、依然として積極的な集客が難しく収支が安定しないという活動団体の悩みを受けて、「港北区みんなの助成金 コロナ特例 居場所継続支援金」を創設しました。

それぞれの居場所では、オンライン環境が整ったことにより、新たな取組が始まりました。スマホ教室やオンラインツアーの他、令和4年度には区の介護予防講座や認知症講演会のオンライン配信のサテライト会場としても活用されました。高齢者が集まるおしゃべりの場ではYouTubeが話題になり、Voが動画配信の研修を受講するなど、活用の幅は広がっています。

中には、コロナ禍で在宅勤務が増え、「Wi-Fi使えます」と掲げた居場所に若い世代がパソコンを持ち込み仕事をする姿も見られました。師岡地区ではそのうちの1人に声をかけ、地区社協の会計にスカウトし、心強い助っ人が新たなメンバーとして加わりました。



師岡地区「ふらっと」チラシ

今後に向けて

2か所をモデルとして導入した「オンライン導入サポート事業」が一定の効果を見せたことを受け、港北区社協が支援する「みんなの居場所」3か所にも同事業を展開し、それぞれに取組の幅を広げています。また「コロナ特例 居場所継続支援金」は過去に遺贈として区民の方からいただいた寄付を活用しました。

今後も区社協のもつ資源や強みを生かし、その時々に必要な支援策を見極めながら地域活動を応援していきます。

1層Coの想い

コロナ禍で先が見えない不安を抱える中、物理的な「場」を維持するための策と、人の「気持ち」を支える両面が必要だと感じ、区社協地区担当者、助成金担当者等とも相談しながら港北区社協としてできるサポートを実施しました。住民のみなさんが重ねてきた話し合いのプロセスや「住民同士がつながれる場が必要」「高齢者の孤食を防ぎたい」という想い、コロナ禍で出かける先を失った1人の高齢者のために緊急事態宣言下でもひっそり居場所の門をあけ続けた担い手のその姿は私たちの「何とかしなくては」の原動力となりました。



高田地区「ゆずの樹」でのオンライン講座

生活支援 Co 同士の仲間づくり、絆づくり

～複数地区にまたがる課題の検討を通じて～



緑区社協 松本 賢剛

取組のきっかけ

緑区では、毎月開催している生活支援 Co 連絡会を、コロナ禍によりオンラインで開催することが増え、2層 Co 同士が直接顔を合わせる機会が減りました。2層 Co からは「2層 Co 同士での気軽な相談がしづらい」「他の2層 Co が普段どんな動きをしているのかを知る機会があると良い」といった声がありました。

生活支援 Co 連絡会では、以前から作業班を設け、複数人での班活動により、他都市の活動の見学やテーマを設定した話し合い等を行っていました。さらにこの班活動を生活支援 Co が共に企画・運営等に取り組む機会とし、他の2層 Co の動きや視点を知ること、2層 Co の不安解消や体制整備事業の推進の場にもつながると良いと思いました。

取組の内容

今年度の班活動は、「インフォーマルチーム」と「ICT活用チーム」2つの班体制により、2層 Co 自ら企画・運営を行うスタイルで進めることとなりました。

「インフォーマルチーム」では、生活支援 Co が把握している地域活動の情報を高齢者に届ける手段について検討を行ってきました。包括主任 CM から CM の地域活動の把握状況を確認したところ、経験年数や事業所の規模等により、情報量に差があることがわかりました。そのため、やむを得ず自ら制度外の対応を行っていたり、把握している情報だけでは目標とする支援が行き届かないことに対して、もどかしく感じることがうかがえました。その後、区内全域の CM 向けに、地域活動を掲載したサイト「サービス検索ナビ」についてアンケートを取ったところ、あまり知られていないこともわかりました。そこで、包括主任 CM と合同で、CM に地域活動を知ってもらいケアプラン作成に生かしていくことを目的とした研修会を開催しました。

「ICT活用チーム」では、高齢者が ICT を身近に感じ、活用できるスキルを身に着けることで、生活を豊かで快適に過ごす一助になることを目指しました。複数の CP が合同でオンラインサロンを3回に渡って開催し、サテライト会場となぐことで、多くの方に身近な CP で安心して参加してもらえる機会の提供につながりました。オンラインサロンでは普段 CP に出入

りしない住民層との出会いや、他の会場の参加者とのつながりが生まれました。

1層 Co の想い

班で取り組むテーマを設定する際には、2層 Co からの「取り組む必要性は感じているものの、自分一人や1つの CP で踏み出すには難しさを感じている」といった声を基に生活支援 Co 連絡会で検討しました。班活動によって、複数の2層 Co が知恵を出し合うことで、新たなチャレンジにつながったのではないかと感じています。

班活動はほぼ毎月実施され、1層 Co ・包括ケア係長も出席し、各班の取組状況を把握するとともに、他の班の2層 Co にも資料確認を依頼するなど、区域で必要な調整を行いました。

今後に向けて

班活動を通じて、生活支援 Co 同士が、お互いの視点や日々の取組を知る機会となり、連携が深まり、日頃の相談がしやすい雰囲気作りにもつながったのではないかと感じています。今後は、他の職種や様々な立場の人たちとの連携を視野に入れながら、引き続き2層 Co 同士の絆を生かし、相談しながら進めていきたいと思っています。



ケアマネジャー向け勉強会チラシ

「高齢者等の移動支援を考える会」の開催

～タクシー会社と連携した支援の仕組みづくり～



都筑区社協 杉崎 雅代

取組のきっかけ

令和3年度に各CPの2層Coと共に、移動に特化した地域アセスメントを進めました。移動に関する支援策の検討は各CPの共通課題となっていたため、区域協議体として「高齢者等の移動支援を考える会」を開催し、タクシー会社と都筑区の特長や移動に関する課題を共有しました。その後、2層Coと振り返りを行い、移動の課題だけでなく、地域課題に対してタクシー会社とどのようなことが一緒にできるかを検討していくこととなりました。

令和4年度も引き続き、タクシー会社と連携した取組について、検討を進めています。

取組の内容

令和4年6月に「第2回高齢者等の移動支援を考える会」を実施し、2つの取組について検討を進めることとなりました。1つ目の取組は通いの場を運営するサービスB団体でのタクシーを利用した移動支援の仕組みの導入に向けた検討です。地域に多数ある通いの場の中から、まず最初にサービスBを選んだ理由は、事業対象者に要支援者を含むため、送迎が必要となる方が多いことが見込まれるためです。

2つ目の取組として、認知症サポーター養成講座等、高齢者の支援に関する知識を身に付けるための研修を、タクシー会社の従業員を対象に実施することとなりました。異変を感じた際の対応等を学んでいただくことで、タクシーを利用される高齢者の見守りについてタクシー会社との連携を図る目的です。

サービスBでの移動支援の検討については、令和4年11月にタクシー会社とサービスB団体との顔合わせを実施しました。各団体とも基本的に自分で、あるいは家族の付き添いで会場まで来られる方を対象に実施していますが、現利用者の中にも送迎を希望される方がいることがわかりました。

また、サービスB団体からは、「送迎があれば通いの場を利用できる方も増えることが見込まれるため、タクシーと連携した送迎の仕組みの導入を前向きに検討したい」との意向が確認できました。



タクシー会社とサービスB団体との顔合わせ

今後に向けて

サービスB団体では、改めて現利用者に対してタクシーを活用した送迎の利用について意向調査が始まりました。また、現利用者の居住地からの送迎ルート等の検討も始まっています。

タクシー会社の従業員を対象とした研修については、勤務体制に合わせたミニ講座等を提案できるよう、2層Coが資料の作成を行っています。

今年度末には「第3回高齢者等の移動支援を考える会」を開催し、今回始まった取組について共有し、各地区での取組につなげていけたらと考えています。

1層Coの想い

移動支援に関してタクシー会社と連携して検討していくには、CPごとに検討するよりも、一旦、区域で課題を整理し、タクシー会社との協力関係を築いた上で、仕組み化の検討をCPと一緒にいった方が良いと考え、区域の協議体として検討を始めました。

CPが行った地域アセスメントでは、移動に関する個別ニーズが確認されていますが、都筑区は比較的高齢化率が低いということもあり、地域住民の中では地域課題として認識されづらい状況があります。地域住民と共に移動の問題をどうするかを考えていくにはまだ時間がかかりますが、将来に備えてタクシー会社と連携した取組を検討する中で、少しずつ地域の方々と一緒に、支援の仕組みを考えていけたらと思います。

目指す地域の実現に向けた 生活支援 Co 自身の役割理解

～啓発リーフレットの作成を通じて～



戸塚区社協 村上 尚子

取組のきっかけ

昨年度末に行った生活支援 Co 連絡会の振り返りの際、2層 Co から「地域に出向いた際に、自分の役割をうまく説明できない」といった課題が共通で挙がってきました。横浜市が発行している手引きや国の資料などはあるものの、住民目線で自分の言葉で熱意を持って伝えていく必要性を2層 Co は、感じているように思いました。

そこで、今年度は「2層 Co としての役割の言語化」について、生活支援 Co 連絡会を活用し、区域全体で考える機会を設けることにしました。

取組の内容

今年度の生活支援 Co 連絡会では、3つの班に分かれて取り組んでいくことが決まりました。その中の広報班では、「2層 Co としての役割の言語化」という共通課題の解決に向けて、2層 Co 自身が生活支援 Co の役割を地域住民に説明していくためのコミュニケーションツールとして、リーフレットを作成することになりました。

まずは自身の役割認識を振り返るために、「体制整備事業が目指す地域を実現していくための2層 Co の役割は何か」というテーマでワークを行いました。その結果「住民同士のつながりづくりを進めるための仲介役」「人と人をつなげる役割」などの意見が出てきました。そこで、1層 Co から「地域住民に『なぜ地域のつながりは必要なのだろうか』と問われたら、何と答えるだろうか」と投げかけを行い、目指すべきことの理解を深める意見交換を積み重ねました。

2層 Co からは「日頃2層 Co として仕事をしている時には、立ち止まって考えることも少なかった。話し合いを重ねることで、改めて地域の方と一緒に目指すべき地域像の共有化をすることや、地域に出る際には自分の役割を意識することが大事であると気付くことができた」といった声が挙がりました。また、同様のテーマで、広報班だけではなく、生活支援 Co 連絡会全体でも話し合いを行ったことにより、改めて体制整備事業の本質について振り返る機会となりました。

検討の結果、生活支援 Co の役割は「一緒に地域のことを考え、応援していく仲間」「地域にあったらいいなと思うことを一緒に作っていく役割」という結論に至りました。話し合いの際は、自分たちを住民の立場に置き換え、どんな言葉であれば役割が伝わり、その後のコミュニケーションが生まれやすいかを考えながら、議論を進めていきました。



生活支援 Co 連絡会のグループワークの様子



生活支援 Co リーフレット

1層Coの想い

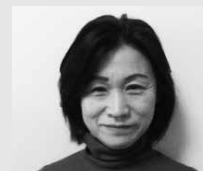
リーフレットを作成するプロセスを通じ、生活支援 Co の役割や立ち位置をより深く考え、住民に伝わるように噛み砕き、言葉にしていると良いと感じていました。1層 Co としては、打合せの際に適宜広報班の目的の再確認を行ったり、2層 Co 同士の仲間意識が育まれる場となるような雰囲気づくりを意識しました。

今後に向けて

リーフレットの作成をきっかけに、2層 Co 自身が何をすべきかを確認でき、何のために地域に出向くかという理解が深まったことにより、自分の言葉で役割について語れるようになりました。そのことによって、住民とともに目指す地域像を描きながら、地域アセスメントを進められるような関係づくりへとつながっていったら良いと思っています。

移動販売サポートボランティア 情報交換会の開催

～販売拠点を中心とした地域づくりに向けて～



栄区社協 若尾 ちづる

取組のきっかけ

体制整備事業を通じて行う移動販売は単なる買物の場にとどまらず、その場で顔を合わせた住民同士が見守りあうことや、つながりを作ることを目的として活動しています。栄区では、この2年間でスーパーによる移動販売の拠点（以下、「拠点」）が19ヵ所設置されました。それぞれの地域特性に合わせ、地元のVoが販売のサポートをするなど住民主体で展開されています。各拠点では、その活動をサポートする生活支援Co・包括・区社協地区担当者などと、定期的に話し合いを実施し、活動の振り返りを行っています。

その中で、各拠点に共通する課題や区域で解決するべきことがあるのではないかと考え、状況把握を行うことにしました。

取組の内容

各拠点の状況を2層Co、区社協地区担当を通じて把握したところ、日頃から地元住民の方々がVoとして販売場所の設営やスーパーの品出しの補助、利用者の品物を家に運ぶ手伝いなどを行いながら、地域に根付いた生活支援の大切な場となっていることが見えてきました。

また、Voからは「最近あの方の姿を見かけない」「1人暮らしなのに、たくさん品物を買っていて心配」など利用者を見守る中での気づきや、移動販売をサポートするVoの役割として、どこまで手助けをすべきかを悩む声が共通して聞こえてきました。

利用者は固定化しており、常連同士の見守りは強固になってきている一方、独居の男性や子育て世代の参加は少ない傾向があり、どのように周知を広げていくかといった課題もありました。

そのような各拠点で抱える悩みや、工夫点などをVo同士で共有することを通じて、それぞれの活動がより発展していくことを目的に、1層Co・2層Co・地域交流Coとで「移動販売サポートVo情報交換会」を企画・実施しました。



買物しやすいように住民の方が
陳列を手伝っています

1層Coの想い

移動販売の場は、買物支援だけにとどまらず、拠点の特徴に合わせながら多様な地域資源と連携でき、地域の情報収集・発信の場、様々な方の居場所といった機能を持つ可能性を秘めています。情報交換会では移動販売の目的である「見守り」「コミュニティ（つながり）の創出」について、Voのみなさんと再確認し、幅広い世代が身近な地域の中でつながりを持てるような地域づくりへとつなげていきたいと思い、企画・運営を行いました。

今後に向けて

地域づくりを目指す上では、より多くの人がつながり、幅広い世代が参加することが大切になります。移動販売の会場で、子育て世代向けの講座、防災訓練、フレイル予防の出前講座などを同時並行で実施することで参加者層を拡大しようと検討している拠点もあります。

移動販売の場が地域住民の生活支援・交流・見守りのある安心して過ごせるランドマークとなるために、生活支援Co・地域交流Co・包括・地区担当者など、専門職が丸となって支援を続けていきたいと考えています。



住民同士の交流の場になっています

一人ひとりが主体的に参加できる 生活支援 Co 連絡会

～区域全体で支えあえる関係性を大切に～



泉区社協 中川 直樹

取組のきっかけ

生活支援 Co の業務は、1 人で事業を展開できるものではなく、様々な団体を巻き込みつつ、地域住民が主体的に関わりながら、まちづくりとして進めていくものです。地域性によってもアプローチ方法は異なり、また、すぐに成果が見えるものでもありません。

初めて 2 層 Co となった方の中には、誰にも相談できずに 1 人で悩み、行き詰まりを感じる方もいました。

2 層 Co からは、毎月開催している生活支援 Co 連絡会について「単なる報告や連絡事項の伝達の場合にせず、一人ひとりが主体的に参加して、自身の業務に生かせるヒントが得られる場にしていきたい」という声も挙がっていました。

そこで、それぞれの実践で培ってきた経験や知識、スキルを共有し、支えあえる関係性を築けるように、2 層 Co・1 層 Co・区役所で生活支援 Co 連絡会の場を活用していくこととしました。

取組の内容

ここ数年、新任の 2 層 Co を迎えていたこともあり、令和 4 年度の生活支援 Co 連絡会では、改めて地域アセスメントの勉強会を実施することとしました。データの活用方法や地域資源を知る方法など、毎回テーマを設けて、アセスメントの考え方や実践方法を互いに学び合っています。

また、生活支援 Co 連絡会で 2 層 Co・1 層 Co・区役所がそれぞれの取組報告をする際には、具体的なエピソードを通じて、どのような学びがあったかを共有するよう工夫しています。

生活支援 Co 連絡会とは別に、2 層 Co が実施する協議体に他の 2 層 Co が見学に行くこともあり、協議体のねらいや仕掛け方、進行方法などを学び合う機会にもなっています。

新任 2 層 Co には、わからないことをそのままにしないよう、先輩 2 層 Co と 1 層 Co とで振り返りの機会を設けるなど、フォロー体制も組んでいます。

今後に向けて

泉区では、2 層 Co・1 層 Co・区役所の三者の連携を大切にし共に学び合い、1 人で悩むことなく区域全体で支えあう関係性を大事にしています。こうした関係性の中でお互いに成長していくことが、体制整備事業の推進にもつながると考えています。

今後、人が入れ替わっても、こうした考え方や関係性を継承していけるように、これまで大事にしてきたことを定期的に振り返り、確認し合う機会を設けていきたいと思います。

1 層 Co の想い

生活支援 Co 連絡会の運営にあたっては、当日の司会を担当する 2 層 Co と 1 層 Co、区役所とで事前打ち合わせを行い、開催前に当日の内容を全 2 層 Co と共有するなど、事前の準備を大切にしています。

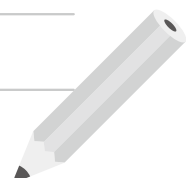
1 層 Co は 2 層 Co との日頃のやり取りを通じて、各 2 層 Co が力を入れて取り組んでいることなどを把握する機会が多くあります。その情報を生かして、様々な経験年数の 2 層 Co が参加する連絡会が、それぞれにとって有意義な学び合い場となるように、事前の調整を大事にしています。



団結力も自慢の泉区生活支援 Co



MEMO





<http://www.yokohamashakyo.jp>

第1層生活支援コーディネーター活動事例集



発行月：令和5年3月

発行：社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

〒231-8482 神奈川県横浜市中区桜木町1-1
横浜市健康福祉総合センター8階
(地域活動部 地域福祉課)

TEL.045-201-8616 FAX.045-201-1620

※この事例集は、横浜市健康福祉局地域包括ケア推進課の委託契約に基づき作成しています。



ほら、
よこはまは
あったかい